



馬耳東風

以前、ドイツの家庭に2週間ほど滞在したことがある。その時に強く印象に残ったのは、彼らは「住宅は人格の一部である」という考えを持ち、人生を楽しむために住宅を非常に重要視しているという事であった。家は単なる住居ではなく「城」そのものであり、時間があれば自宅の工房に入り、改造のための設計図を描き、工作機器を使いながら家のグレードアップを楽しむ家族の姿があった。その生活空間を流れるゆったりとした時間に彼ら人生の豊かさを感じた。そんな彼らと生活を共にしている時、ふと石川県で農家を訪問した時のことを思い出した。その家は、広い前庭を経てその先に玄関棟があり、中に入ると左右に西棟、東棟、正面に大きな母屋があり、中心には雑踏から隔離された広い中庭があった。その家はその地域における平均的な家とは思わないが、富山平野の農業地帯にある屋敷森に囲まれた邸宅を見たときと同様にこの地方における住いの豊かさを感じたものだ。総務省の統計によると都道府県別の一住宅当たりの平均床面積の広さは富山、福井が1、2位である。彼らの家に対する思い入れの強さはドイツ人の抱くそれと同等ではないかと思われた。そこでは代々続く家族の生活が営まれ、様々な事が世代を越えて継承され蓄積されてゆくものと思われる。それによって家格が創られて行くと考えれば、やはり家は単に生活の場所というより物心両面でもっと大きな意味を持つ空間であろうと思われる。

戦後、経済的には非常に豊かになったが、その一方で「家」という概念が大きく変わり、家族という最も小さ

な共同体がほとんど崩壊したと言われて久しい。それが学校、地域社会など様々な共同体の運営を困難にし、維持できなくなってきた根本的な原因ではないかと思われる。家庭内で育まれる情操はいつの時代でもその人の人格形成に大きな影響を及ぼしている。最近実施されている小・中学生を対象とした全国学力調査の結果、過去7回の調査で常に富山、石川、福井の3県の子供たちが全国でトップレベルの良い成績を収めている。学力評価法には様々な物差しがあるだろうが、基礎学力、応用学力で常に上位の成績を出していることは素晴らしいことである。また、今年春の選抜高校野球選手権大会で敦賀気比高校が優勝した。北陸という自然条件の厳しい地域で文武両道に優れた成績を収めることができたのは勿論、当事者の努力の結果であることに間違いはない。しかし、全国には勉学やスポーツに打ち込むのに好条件が整った地域は多くあろう。それらを超えてこれら3県の学生が素晴らしい成績を収められた背景にあるものは何であろうか。

生活、教育、労働、健康、安全などを指標とした「幸福度指数」という尺度があるが、2013年の調査でOECD加盟国にブラジルとロシアを加えた36か国中、日本は21位である。トップ3はオーストラリア、スウェーデン、カナダである。これを国内に当てはめて見ると福井、富山、石川がトップ3である。生活基盤が充実し心にゆとりを持てる社会では文化が生まれ、育まれ、蓄積されてゆく。「真の豊かさとは何か」考えさせられることである。

(青)